特集

グローバルなものづくりを支えるニッポンの海外拠点

第Ⅲ部 海外駐在事情

インド滞在記*

寛 登 行**

The Diary of India Stay*

by KAKEHI Takayuki**

キーワード インド、食、交通、観光

1. はじめに

私はホンダエンジニアリング株式会社のパワートレイン生産技術部門に所属しております。

現在、ホンダではインドの四輪第二工場を首都デリーより約70km離れたラジャスタン州に建設中です。この第二工場はエンジン部品加工から完成車まで一貫で生産する工場となる予定で、私はエンジン部品の機械加工ラインの企画メンバーとして、2007年度のIMTEX（インド工作機械見本市）視察にはじまり、設備製作メーカーの選定、設備検証、据付までの約1年半の間に数度インドに渡りTOTAL約2ヶ月半滞在しておりました。ここでは、その間に私が経験し、感じ取ったインドについて綴ってまいります。本記事は私が個人的に感じ取ったインドであり、他の方や一般的なイメージとは異なった事があるかもしれませんが、もし、皆さんがインドに滞在することがあれば役立てて頂ければ幸いです。

2. 食に関して

まず、生活する上で最も大事な食について述べたいと思います。

皆さんも耳にした事があるでしょうか。「インドでは3食カレーである」というお話し、これはインドの人達にとってはごく普通の事であり、彼らは常にカレーを好んで食しています。「本当なのか?」と、疑われる方が多いかもしれませんが、「日本人は3食味噌汁」です。その「カレー」は私達日本人が普段目にしているものとはかなり異なっており、さらに、非常に多くのバリエーション

がある事に驚かされます。これは日本食を調理する際、味噌や醤油など様々な調味料を使用することで日本の味を出しているのと同様、インドではこの調味料がターメリックに代表される香辛料であり、これらの香辛料が私達日本人に、インド料理が一括りのカレーであるかのように感じさせるのです。従って、日本食に数え切れないくらい多くの種類があるように、インドのカレーにも様々な種類が存在するのです。

もちろん、会社での昼食は特別に注文しない限り毎日がカレーです（図1）。

このように私はインド滞在期間中、様々なカレーを食しました。その中でもNo.1は、デカン高原にある都市バンガロールで食した「ほうれん草カレー」でした。日本でも何度かインド料理店で本場インドカレーなるものを食べた事はありませんが、あれほど美味なカレーは今まで食べた事はありません。もし皆さんもバンガロールに行く事があったら是非、「サマルカンド」と言うレストランに行ってみて頂き、インド料理の奥深さを味わって見て下さい。

インド料理の見た目は日本の会席料理やフランス料理のように華やかではありませんが、食べてみるとそのおいしさに感動するのは間違いないでしょう。インドに行

図1 会社でのランチ（一例）

*原稿受付 平成20年11月10日
** ホンダエンジニアリング株式会社

くことがあれば是非絶品のインド料理を食べてみて下さい。

3. インドの交通事情について

インドは長くイギリスの統治下にあった影響から、車は日本と同じく左側通行（右ハンドル）となっています。また、ヨーロッパ同様、ランナバウトと呼ばれるロータリーが多く見られますが、このランナバウトがインドの交通ルールには陳腐化した交通システムとなり、ここをスムーズに抜けることが困難で、車があふれ大渋滞を引き起こしています。

インドで車を運転する日本人は殆んどいないと思いますが、もし、運転をしようと思われる方がいるなら、相当運転技術を磨いて心して運転をして下さい。なぜなら、インドでは2車線の道路に3台の車が並ぶのは当たり前、その車の間を自転車やバイク、リクシャー（図2）が抜けて行きます。車と車、車と自転車、車と人、車と牛や駱駝が数センチの間隔のスレスレで動いているのです。

このような状態では接触事故は日常茶飯事です。しかし、日本のようにその度に車を止め、警察を呼んで現場検証なんて事はありません。お互いに文句を言い合っているぐらいで、直ぐにその場を立ち去ってしまいます。

図2 疾走するリクシャー

図3 トラック後部に記載された「HORN PLEASE」の文字

交通事情の中で最も大きな差が見られるのは、クラクションの使い方でしょうか。日本ではクラクションを使うことは殆んどありませんが、インドでは車に乗っているクラクションが聞こえないことはありません。また、その音の大きさと頻度には驚かされます。日本ではインドのように頻繁にクラクションを鳴らしていると、至る所で言い争いがありそうですが、インドではそのような言い争いの図は全く見られません。お互い様ということなのでしょうか？それどころか、トラックの後ろにある「HORN PLEASE」の文字には驚くでしょう（図3）。

4. 依然残るカースト制度の影

現在では法律上廃止された事となっている「カースト制度」ですが、私には依然として「カースト制度」が残っていると感じられました。街を見た時、そこには明らかに貧富の差が存在していました。私たちが滞在していたのはセキュリティと出張者の体調管理面から、欧米のビジネスマンやインドの上流階級が宿泊するホテルであったので、ホテル内は綺麗に飾られ、常に快適な温度に保たれ、蛇口を捻ればシャワーで汗を流すことが当然のように出来ました。

一方で、窓のカーテンを開けて外を眺めると、そこには脇の空き地に廃材で作ったテント（図4）に住み、シャワーの代わりに窪地に溜まった水で体を流している人達の姿が見られました。工場までの道のりの中でこのような生活をしている人達が至る所で見られるのです。

仕事においてもカースト制度の影は見られました。設備を調達する為に現地メーカーを訪問した時、そこには命令する人、命令される人の構図がありました。上司、部下の関係ではなく、明らかに何らかの身分の違いがあるかのようなやり取りがあり、私には衝撃的な出来事でした。

このような差別社会の中でもインドの人達を見てみると日本人にはない活気が感じられました。日本人がなくなったハングリー精神を持っているのでしょうか。前述のような差別が本当の意味で無くなった時、この国は信じられないくらいの力を持つのであろうと思いました。

図4 人々の生活一例

図5 フマユーン廟

図6 クトゥブ・ミナールの塔

5. インドの観光

私はTOTALでは2ヶ月半程度インドに滞在しましたが、1回の滞在期間は最長でも1ヵ月ですので観光に関してはそれほど詳しくありません。それでも、世界遺産を2つほど訪問しましたので紹介いたします。

1つはタージ・マハル廟の原型ともなったと言われるフマユーン廟（図5）を訪問しました。フマユーン廟は左右対称の建物の中央に輝くような総白大理石のドーム屋根が架けられ、壁面は赤砂岩に白大理石を組み合わせた鮮やかなデザインとなっており、当時のインド建築技術の完成度の高さを感じました。フマユーン廟でこの美しさであるので、世界的に有名なタージ・マハルは言葉では言い表すことが出来ないほど綺麗に違いないと思いました。私は残念ながらタージ・マハルを訪れる機会がありませんでしたが、皆様に機会があれば是非訪問してみてください。

もう1つの世界遺産はクトゥブ・ミナールです。赤と

ベージュの砂岩で出来た高さ70メートル以上もある塔で、塔の下から見上げるとものすごい迫力で迫ってきます。（図6）その姿は、実に力強く堂々とした造形であり、砂岩の組み合わせでこれほどの塔を作り上げる当時の建築技術は本当に素晴らしいものであると感じました。また、このような建築物を作らせた統治者の権力も感じ取ることが出来ました。

6. おわりに

最後に私が感じ取ったインドの将来性について述べます。インドは非常に活気のある国であり、世界が注目している事を肌で感じ取ることが出来ました。この勢いは当分衰えることはなく、社会制度が変化し本当の意味でカースト制度が無くなった時、アメリカや中国を押さえ世界一の経済大国になるのではないかと思います。

是非、機会があればインドのすばらしさを自分の目で確かめてください。